

眉村卓

TOKUMA NOVELS 長篇青春冒険ロマン

不定期エスパー

2

〈デヌイベ〉
〈能力〉





TOKUMA NOVELS

眉村 卓

不定期エスパー **2** 〈デタイベ〉
〈能力〉

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

©Taku Mayumura 1988

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 磯谷 励〉

ISBN4-19-153762-8

眉村卓

TOKUMA NOVELS 長篇青春冒険ロマン

不定期エスパー

2

〈デヌイベン
能力〉



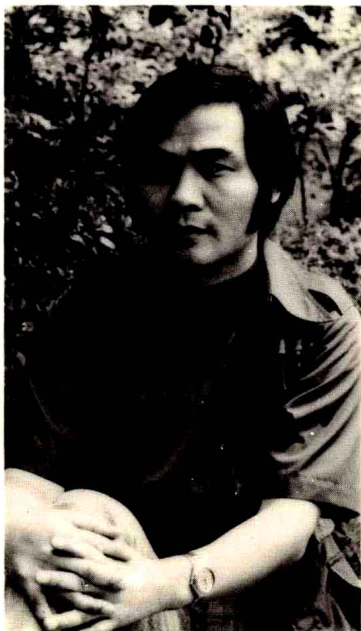
-8 C0293 P700E(1) 定価=700円
(本体=680円)

不定期エスパ―**2**・眉村卓

ふていき

まゆむら たく

本書に収録された部分は、一九八二年九月号より一九八三年八月号まで、『SFアドベンチャー』に掲載されたものである。ほぼ、六年の歳月が流れている。一口に六年前と言っても、その間ひとつの物語を継続させるということが、どれだけ大変なことか——そんな風に考えながら読み進むのも一興かも知れない。



TOKUTSU NOVELS



長篇青春冒險ロマン

不定期エスパー
2
〈タイム・パワー〉



徳間書店

TOKUMA NOVELS

目次

デヌイベ

7

能力

157

本文插画・小林智美

デヌイベ

おかしい夢だった。

ぼくは腰をおろし、顔前のスクリーンを注視していた。ぼくの手首はスクリーンの下の操作盤に載り、指はいくつもあるボタンのひとつを押そうとしている。そのボタンを押せば、何かが発射されるのだ。攻撃用のボタンであることが、よくわかっていた。

スクリーンに、景色が現われた。

カイヤツ府だ。

カイヤツ府の……ぼくがよく知っている町角のひとつである。

「撃て！」

どこから、声が流れた。

スクリーンの像は、エレスコブ家カイヤツ府屋敷になった。屋敷がわっと拡散すると、そこに、エレン・エレスコブが立っているのだ。

エレンは微笑していた。

「撃て！ 撃たんか！」

どこかからの声は、鋭い調子に変わった。「何をしているか！ 撃つんだ、イシター・ロウ！」

イシター・ロウ？

イシター・ロウとは……ぼくのことだ。エレスコブ家の警備隊員、エレン・エレスコブの護衛員のイシター・ロウなのだ。

それが、エレン・エレスコブを撃てるか？

「撃てますか？」

スクリーンのエレンは静かに笑った。「わたしに忠誠を誓ったあなたに、そんなことが出来ますか？」

「撃つんだ！」

また声が飛んだ。

どうすればいいんだ？

ぼくは、どうすればいい？

ぼくは自分の指に……腕に、目を落とした。ついで、自分の服を見やった。ぼくが着ているのは……エレスコブ家の制服ではない。どこの服だかわからないが、エレスコブ家のものではないのだ。

「貴様！ 自分を追放したエレスコブ家に、いつまで未練を抱いているのだ！」

声は、ぼくの耳元で爆発した。

「逃げましょう」

女の声が聞えた。見ると……シェーラだった。シェーラはぼくの腕をつかんでいる。

「シェーラ」

ぼくは呟いた。

「撃たんか！」

声。

「わたしを撃てます？」

と、スクリーンのエレン・エレスコブ。

「もう構わないで」

シェーラは、ぼくの腕を引っ張った。「あなたはわたしと行くの。こんなごたごたから逃げて……一緒に飛ぶのよ！」

「……………」

「さあ！」

シェーラは、ぼくの腕を引っ張る手に、ぐいと力を入れた。ぼくは椅子からころげ落ちて――。

……………。

ぼんやりとした光が、ぼくの視野にあった。ぼくはちょっとした間、わけがわからず……それから自分が、宇宙船内の部屋にいるのを悟った。手を伸ばせば届く近さに、天井の小さな淡黄色の灯がある。船の駆動装置の低い持続音がひびいているばかりで、ああいう変な夢を見ていたぼくには、静か過ぎる感じだった。

下段のベッドのハボニエは、よく眠っているらしい。

それにしても今は……。

今の夢は、何だ？

ぼくには、どうも気になった。夢というのは、人間の潜在意識の投影だそうである。となればあれは、自分がエレスコブ家のメンバーから外されるのをおそれている、その心理があんな夢と化したのかも知れない。エレンを撃たねばならない立場にあったというのも、ぼく自身がエレンに惹かれていて、敵対するようなことは決してなりたくない、無意識に考えていたからだ――との説明も可能である。だがどうしてあそこ

にシェーラが出て来るのだ？ いや……人間はまた、

忘れかけている事柄を夢でよく見るものだともいう。表層意識から沈んだ記憶は、睡眠中に抑制が取り払われると、ぼかりと浮きあがって来ることが多いという話だ。よく自身にもその経験はよくあった。だからあそこでシェーラが出現しても、おかしくはない。

——というのが、まあ常識的な解釈であろう。

が……ぼくが気になるのは……それだけではなかった。単におのれの潜在意識がそんな夢を見させたのなら、何も心配する必要はないのであるが……ぼくがひやりとしたのは、ひょっとしてそれが、ぼくのエスパーとしての能力が起きあがろうとしているためではないか……完全に起きあがってしまったまいまでも、微弱なかたちで、予見の力が動いているのではないか、ということであった。これは二重の意味で、ぼくには不安である。今、こんな状況下でエスパー化するのには、あつてほしくないことであつた。エスパー化すればぼくはその事実を申告しなければならず、エスパーでは不都合な勤務から外されるのである。エスパーでは不都合な勤務とは……ぼくの仕事の大半になるに違いない。今、そんなことになるのは厄介だつた。困るので

あつた。そしてもうひとつ……もしあの夢が予見であつたとすれば……ぼくは将来、ネイト・カイヤツとかイヤツ府か、それともエレスコブ家かエレン・エレスコブひとりに対してだけなのか、ともかく敵対する立場になるようなのである。それも、エレスコブ家を追放されて、というかたちでだ。それはいやだつたし、そんな不名誉な目にも遭いたくはなかつた。

ただの夢か……予見か……。

ぼくにはわからなかつた。わかる由もなかつた。

ぼくは心を澄ませてみた。けれども何も感じられない。どうやらぼくはまだ非エスパーのままらしい。エスパー化しつつあるのではなさそうである。ぼくはほつとした。

とはいえ、さっきの夢と、それにひきつづいて生じたそうした想念のおかげで、ぼくはすっかり目が冴えてしまった。じつと横になっているのが苦痛な位、敏感になつていたのだ。

ぼくは時刻を確認した。次の勤務までまだだいぶ間がある。

無理をして眠ろうと努めるよりも、少し部屋の外を

歩いて、心を落ち着かせ、それからもう一度寝るほうがいいかも知れない。

ぼくはそっと身を起こし、ベッドから床へと降りた。

「どこかへ行くのか？」

眠っているとばかり思っていたハボニエが、声をかけた。

「ああ……ちょっと廊下を歩いてくる」

ぼくは答えた。

「そうか。それもよからう」

と、ハボニエ。「だいぶうなされていたようだぞ。

こっちも目がさめてしまった」

「悪かったな」

「なに。初めての宇宙旅行では、誰でも神経質になるものさ。最初の緊張がゆるむと、今度は夢のほうへ廻

って来る」

いうと、ハボニエは沈黙した。多分目を閉じて（それとも、ずっとそうだったのか）また眠りにかかったのだらう。ぼくもそれきり声をかけず、音を立てないようにして服を着ると部屋のドアを引きあげた。

出ると、廊下だ。

廊下は、部屋の中よりもずっとあかるい。これは航行中必ずどこかの部門が起きているし、生活時間帯も人によってまちまちなので、同じあかるさが保たれているのである。

ぼくは、幅二メートル弱のその廊下を、考えながら歩きだした。

ぼくが夢にうなされたのを、ハボニエがそんな風に解釈してくれたのは、まあ助かったという気分だった。ぼくはむろん先刻の夢の内容を他人に喋る気はないが、そんなものを見たとは、あまり知られなくなかったのだ。

エレスコプ家の人間としては、いささか問題の余地のある夢だからである。

いや……待てよ。

そんなに大層に考えなくてもいいのではないかと、ぼくはふと思ひ直した。あの夢なんて、実は何ということもないのではないか？ ハボニエがいった通り、あれは単に初体験の宇宙旅行がもたらした、わけのわからぬでたらめな、混乱そのものの夢に過ぎなかった

のではあるまいか？　あまり深く考えるほどのものではないのではないか？　その可能性は充分にある。というより、それが一番本当らしい感じもするのだ。だつたら……ぼくはすっかり気が楽になり、思いをほかへ転じることにした。

あんなことをハボニエがぼくにいった所以は、彼がすでに一度かそれ以上、宇宙旅行をした経験を有しているからである。彼は自分でそうだと認めたのだ。もつともハボニエは、それがいつ、どんな状況下であつたかは、話そうとしなかった。以前にぼくが聞いた彼の経歴から推せば、エレスコプ家の一員になつてからというのが当たつていそうだが、その経歴だつてつまびらかなものではなし……違つてゐるかも知らない。しかしいずれにせよ、ぼくはそのおかげで、ハボニエから、この宇宙船やその他関連した事柄について、いくつか新知識を仕入れることが出来た。この船が発進してから、これでちょうど三日めである。それだけの間に仕込んだにしてはまことにささやかな、かつ断片的な知識だけれども、知らないよりは知つておくにこしたことはないのだ。それに、自分自身でつかんだこ

ともあつたし、ハボニエ以外の人に訊いて得たこともあつた。

それらを総合して要約すると、この船はエレスコプ・ファミリー号といつてエレスコプ家が保有する三隻の宇宙船のひとつである。他の二隻はエレスコプ一号、エレスコプ二号と呼ばれ、運賃を取つてカイヤツ・カイヤント間を就航する大型定期貨客船なのだ。それに反してこのエレスコプ・ファミリー号は、その名の示す通り、エレスコプ家の専用船であつた。エレスコプ家の要人が、エレスコプ家にとって重要な仕事をするさいに、随時運航される小型船である。三十名の乗務員によつて航行し、乗客定員は同じく三十名。もちろん乗客の荷をかなりの量搭載するのはたしかだが、この乗務員と乗客数の比率を見ても、特別な船であるのは、あきらかだつた。特別なとなれば、その他にもいろんな点がある。要人のための個室は、いざというとき、それ自体が生命維持装置を備えた脱出カプセルとなること……要人と乗務員がやたらに顔を合わせないように、船内の生活区は準二重構造になつてゐること……むろん軍船には及びもつかないが、一応の

戦闘用の装備を持っていること……カイヤツ府屋敷の緊急会議室とスクリーンでつながる会議室を備えていること……などだ（ついでにそれらを、ぼくたち護衛員としての立場からいえば、当然ながらこちらは脱出カプセルとは無縁だったが、任務の必要上、部屋は要人たちと同様、準二重構造の内側にあった。戦闘用装備はどうなっているのか知らない。それはその部門の警備隊員が担当していたからだ。かれらはそうした武器の扱いかたをマスターしているし、こちらはそんな訓練は受けていないのだ。しかもかれらとぼくたちは、滅多に出くわすことがなく、会ってもきちんと敬礼をかわすだけである。かれらとぼくたちは、隊長のモリス・ウシエスタの下にいるには違いないが、全く別の系統に属していたのだ。船内の会議室については……どこにあるのかさえわからなかった。エレン・エレスコプがその会議室を使うときがあれば、ぼくたちもいやでもそこへ行くことになるだろうが……現在のところはそうであった）。このエレスコプ・ファミリ1号は、カイヤツ・カイヤント間のみならず、カイン星系の他の惑星へも飛ぶことがある。ときには、カイ

ナ星系を出て、チェンドリン星系へ赴いた例もあるという。が……それ以上の、ネプトーダ連邦の他のネイトへまで行ったことはないとの話であった。能力的には航行自体は不可能ではないけれども、それだけの期間、乗員や乗客の生活を支えて行くための水や食糧や資材を積載するのは無理らしいのである。換言すれば、連邦間就航船が備えているのと同質の駆動装置は持っているが、出力が足りず速度がそれだけ落ちるために、積載量一杯に積み込んでも、安心出来ないというわけであった。本来なら、これは工夫しだいでは何とかなる、との見方も出来よう。乗っている連中がそれなりに耐乏生活を送れば行きつけるはずである。それは事実であった。けれども……事情はそればかりではなかったのだ。決定的なのは、このエレスコプ・ファミリ1号が、連邦登録を受けていないことである。連邦登録を受けるには、性能が基準に達していなかったのだ。登録船でなければ、行くさきぎぎの宙港でこの設備を利用出来ないおそれがある。それに……もっと重大なことがあった。ネイトとネイトの版図の境界域では、しばしば掠奪船が出没するのである。そ

れに対抗するだけの本格的な武装もなく、軍船の同行もなしにそんな宙域に入るのは、自殺行為に似ていた。

——というしだい、エレスコブ・ファミリー号は、ネイトIIカイヤツ圏内でしか行動しなかったのだ。

こう述べて来ると、エレスコブ家保有の宇宙船群がどういうものであるか、およそは把握出来よう。そして、エレスコブ家が三隻しか船を持っていないという現実も、いやでも浮き彫りにされるに相違ない。そうなのだ。エレスコブ家のこの分野での実力はそんなところなのである。なるほど見ようによつては宇宙船を三隻も保有しているのは大したことだが、三隻は三隻に過ぎない。ただ……エレスコブ家を弁護するつもりではないが、これにはエレスコブ家なりの計算も働いているようであつた。エレスコブ家としては、自家で宇宙船を多数保有するよりも、他家の宇宙船をも使い運賃を支払って荷や人員を運ぶほうが有利だとしているのだ。宇宙船の保守・点検整備、改装、稼動効率などの費用と、毎回ごとに払う運賃とをはかりにかけて、そうすべきだと方針を定めている、というのが、ぼくの仄聞したところであり、実際にもそのようであつ

た。

宇宙船といえば、ぼくはもうひとつ、何となくがっかりする話も聞いた。ひとつの星系間を往来する、それもごく旧式の宇宙船を除いて、現在ネプトード連邦内で使われている船の駆動装置は、ほとんど全部がレンセブラ複合駆動装置である。推力・反重力・跳航のどれもが可能で、しかも効率良く設計されたレンセブラ複合駆動装置は、他のさまざまな駆動装置を旧式なものにしてしまった。ひとたび駆動装置の王座につくや、この方式は次々と改良を重ねられて、いよいよ効率のいいものになって行つた。だから、いうまでもなくエレスコブ・ファミリー号にも、出力は小さいながら、このレンセブラ複合駆動装置の第何型かがとりつけられているのだ。しかし……その絶え間のない改良は、つまるところネイトの工業力の競争だったようである。よりすぐれた技術水準を有するネイトが、よりすぐれたレンセブラ複合駆動装置を開発し、立ち遅れたネイトに売り込む——その優勝劣敗の歴史でもあったのだ。そして、ぼくががっかりしたというのは、現在のネイトIIカイヤツにおいては、ネイトIIカイヤツ

製のレンセブラ駆動装置を備えた宇宙船は、すでに一隻もないという事実であつた。エレスコブ家だけではない。ネイトIIカイヤツのどの家もがそうなのだ。ネイトIIカイヤツの宇宙船が使用しているのは、ネプトーダ連邦最強最大のネイトIIダンコールか、もしくはそれに次ぐネイトIIダンラン製の駆動装置なのであつた。しかもそうした装置は、今やおびただしい特許に守られたブラックボックスとなつており、補修や修理にしてもユニット交換が当り前になつてゐるというのである。ぼくはそうとは知らなかつた。ぼくが宇宙船に興味を抱いていた時分には、ネイトIIカイヤツはまだほそぼそではあるが、自前の型のレンセブラ複合駆動装置を試作・生産してゐたと聞いてゐた。それらの技術は疑いもなく負かされ潰滅したのだ。なるほど、宇宙船の船体やコントロール機構の一部は、ネイトIIカイヤツで生み出されてゐる（ついでにいうが、エレスコブ家はそうではない。エレスコブ家はそうした高水準の工業製品は、他家から購入してゐるのだ）。そうして完成された宇宙船は、宇宙船全体としてはネイトIIカイヤツ製である。ぼくは、というより多分相当

な割合の人々が、すべてネイトIIカイヤツの力で仕上げられたと、漠然とそう考えてしまふけれども、かんじんの駆動装置は他のネイトの製品なのだ。自分のネイトでそんなものを作つていたら高くつくし性能は落ちるから、部品として使つたのだといわれればそれまでだが……しかも、ネイトとは連邦の一員なので、連邦構成ネイトどうしは長所を利用し合つて共存共栄すべきだといわれればそれまでだが……あまりうれしい話だとは、いいかねるのであつた。

ところで……。

ぼくはそんな想念を脈絡もなく追いながら、いつの間にか廊下をだいぶ来てゐた。照明が単調で、両側に似たようなドアの並ぶ廊下なので、うかうかと歩いて来たのである。といつても、ぼくの部屋の近くの廊下の大体のかたちは覚えてゐるから、別に迷つたわけではない。ぼくはそこできびすを返して、今来たコースをたどることにした。

と。

行く手に、人影が現われたのだ。
ぼくは、はっとした。

それは、エレン・エレスコブと船長と、それにパイナン隊長だったのである。何の用でここを通りかかったのか、ぼくにはわかるはずもないが……船長を先頭に、つづいてエレン・エレスコブ、そのあとからヤド・パイナンが来るのだった。

ぼくは、廊下の片側に身を寄せ、頭を下げて、三人が通り過ぎるのを待った。

船長がぼくの前に来て、こちらに領きながら行き過ぎようとしたとき。

「お待ちなさい」

エレンの澄んだ声がした。

船長が足をとめ……ぼくは、エレンがこちらへ歩み寄るのを認めた。

ヤド・パイナンは、これも立ちどまって、こっちに無表情な顔を向けている。

「眠れないのですか？ イシター・ロウ」

エレンがいった。

「——は」

ぼくはとっさに口ごもりつつ、そう答えた。

「無理ないかも知れませんか。これはあなたにとって、

最初の宇宙旅行ではありませんか？ そうなのでしょ
う？」

「はい」

ぼくは、さらに頭を下げた。

「でも、なるたけよく休んで、気力と体力をやしな
ておいて下さいよ。今回の旅は、相当ひどいことにな
るかもわかりませんか」

エレンは静かにいう。

ぼくは、相手が返事を期待しているのかどうか、判
断がつかなかった。だから、すぐには何もいえなかつ
たが……彼女がそのまま待っているようなので、自
分の気持ちを口に出した。

「及ばずながら、全力をつくすつもりであります」

「頼みます」

エレンは領き、そのまま歩きだそうとして、またこ
っちに顔を向けた。

「聞くところによると、あなたは外出しても、時間
に
ならないうちに帰って来たりするそうですね」

エレンは微笑含みの声を出した。「遊ぶのが嫌いな
のですか？ それとも不得手なのですか？——真面目